

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04259

研究課題名(和文) 自己と他者の特性情報集合の連合に関する研究

研究課題名(英文) Linkage between sets of trait information about the self and other

研究代表者

福島 治 (Fukushima, Osamu)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：40289723

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：対人関係における相互作用は、その関係における自己と他者の様々な行動情報を含んでいる。その全体を表象すると考えられているのが関係性スキーマである。スキーマ理論の特徴の一つはスキーマ間の独立性であり、ある関係性スキーマ内の自他の特性情報は他のスキーマ内の自他の特性情報とは独立であると予測される。本研究でその部分的な証拠は得られたが、関係性による特性情報の区分は予想よりも曖昧であった。そのうえ、関係間の変動だけでなく、関係内における自己の特性判断にも一定量の変動があった。人は同じ関係性においても自己に関して異なる判断をする。この変動には自己愛のような個人差要因が影響することまでが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

対人関係における他者とのやり取りは、私たち自身に自己の特性に関する情報をもたらし、アイデンティティを支える証拠となる。その情報は、関係ごとに構成されたと考えたが、想定よりもその区分は明確ではなかった。自己の特性情報は、関係によるゆるやかな区分けを持ちながら、関係内においても一定の範囲で日々変動するという性質をもつようである。こうした特性の自己認識の不確かさは、不確実な事態を受容する人の柔軟性について私たちの理解を一步進めるものである。

研究成果の概要(英文)： Social interaction in interpersonal relationships includes a lot of behavioral information about the self and other. Researchers have thought that the whole of them is represented as trait information in relational schemas. One of the typical feature of schema theory is a relative independency of information between schemas. Thus, trait information about the self and other within a relational schema is independent from one another. The present study produced some evidence about that, but the distinction between schemas was not so strict. In addition, the substantial variability of trait judgments was found not only between relationships but also within a specific relationship. People judge differently about their trait if they were at the same relationship. We revealed that this variability is related with individual differences such as narcissism.

研究分野：社会心理学

キーワード：自己概念 対人関係 特性情報 自己愛

1. 研究開始当初の背景

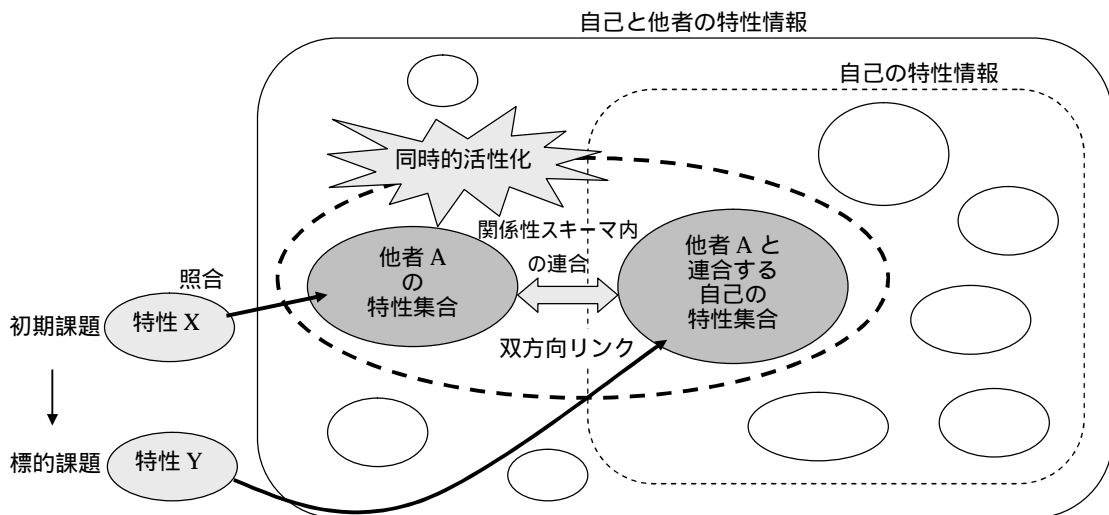
自己表象と他者表象の関連を扱う領域には大別すると2つの研究系統がある。1つは自己表象の重複(overlap)という見方であり、その重複を2つの円の重なる程度で表すIOS尺度の開発や自己と親密他者や内集団メンバーとの共有特性が非共有特性よりも特性判断が速いとする知見が知られている(Aron et al., 1991; Smith et al., 1999)。もう1つは、if-then 対応の枠組みで自他の関連をとらえる見方である。この立場は基本的には自己表象の分化を前提としており、特定の他者に対応する分化した自己表象について、理論的には関係性スキーマや重要他者表象と固有の対応をもつ関係自己として論じられてきた(Andersen & Chen, 2002; Baldwin, 1992)。実証的には他者の視覚的イメージが自己評価を変化させること(Baldwin & Holmes, 1987; 福島, 2003)、適用される自己ステレオタイプの内容が相互作用他者に依存して変化すること(Sinclair et al., 2006)、重要他者と類似した特徴をもつ他者との相互作用が、その重要他者に対応する関係自己(Hinkley & Andersen, 1996)や、重要他者と共有する価値観や政治的信念を活性化すること(Przybylinski & Andersen, 2015)などが見出されてきた。

こうした背景のもとで申請者は、後者の if-then 対応を枠組みとする系統に沿って個人内での自他の特性情報の連合を検討するため特性判断の実験を重ねてきた(福島, 2011 他)。現実の自他の相互作用は様々な行動情報を含んでいる。それらから特性情報が形成されるとすると、個々の特性の意味表象の一つひとつが各人物と連合するとみるよりは、相互作用の履歴全体を表象するような集合的特性情報を構成するとみた方が合理的である。そのような集合的信息のモデルは関係性スキーマと符号する。そして、スキーマの特徴の一つは他の情報との独立性である。自他の特性情報が関係スキーマ内で連合するというスキーマモデルが妥当ならば、ある他者の特性判断は同じ関係スキーマ内の自己の特性情報を同時に活性化したが、他の関係スキーマ内の自己の特性情報とは独立なのでこれを活性化しないはずである。

そこで、実験では2つの課題を連続して行う課題促進パラダイムを用いた。初期課題が他者の特性判断であり、直後の標的課題が自己の特性判断であった。ある他者の特性判断は、別の他者ではなく、その他者に対応する自己の特性判断のみを促進すると予測を検証するためのデザインである。現在までのところ仮説と一致する結果も得られているが、刺激人物(友人や親)によって効果が異なり、必ずしも十分な再現性がみられなかった。分化した自己表象が相互に独立であるとする見方は他にもあること(McConnell, 2011)、しかし関係性スキーマの構成要素として自他の特性情報集合間の連合を調べる研究は十分でないことから検証を継続する必要があった。

2. 研究の目的

自他の特性情報を集合としてみると、特性判断課題は、提示された単語とそうした集合との照合作業である。もし次図のように、他者の特性集合と特性語 X の照合作業が、当該関係スキーマ内で連合する自己の特性集合を同時に活性化するならば、その直後に遂行する自己と特性語 Y との照合作業は促進されるはずである。



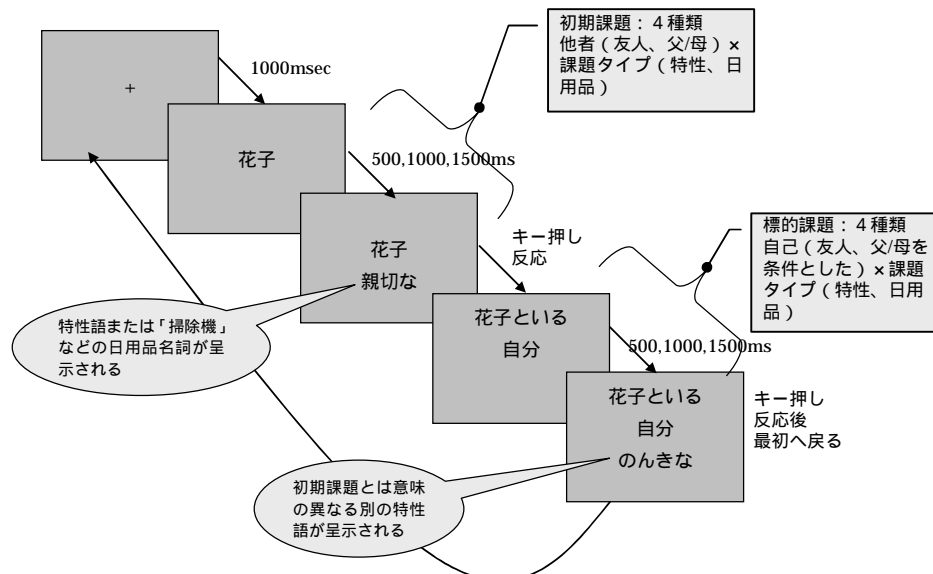
特性 X の照合作業が同時的活性化を生じさせるので特性 Y の照合作業が促進される。

図 1. 特性情報の構造に関するモデル

3. 研究の方法

ある他者の特性判断の後にその他者に対応する自己の特性判断のみが促進されることを示すため、課題促進パラダイムを用いた実験を行った。これは、2つの課題を連続させ、1つ目の課題遂行(初期課題)が2つ目の課題遂行(標的課題)の反応時間を促進させたとき、2つの課題の認知処理に用いた情報間に関連があるとするロジックに基づく。

そこで初期課題では他者AまたはBについて特性判断を課し、標的課題では各他者と対応する自己についての特性判断を課す。他者Aの特性判断の後、他者Aと関連する自己についての特性判断が別の他者Bと関連する自己についての特性判断よりも速いか、他者Bについても同様の関係がみられるかをテストする。



基本的な実験課題の流れは、次図のようであった。判断対象の指示ラベルを示した後に特性語を呈示し、その特性語が指示対象に該当するか否かの判断をキー押し(「はい」または「いいえ」)で求めるものである。他者に関する指示ラベルはその他者名(友人の呼び名など)とし、他者と関連する自己の指示ラベルは、「(他者名)という自分」という形式とする。ただしこの形式では初期課題と標的課題でラベルの重複があり、それが標的課題の指示ラベルの知覚的な促進をもたらす結果、判断の速まる可能性がある。そこで指示ラベルによる知覚的促進が起こっているのかを確認するための統制課題を設定する。この課題は、ラベルの呈示方法と標的課題は実験課題と同一だが、初期課題で他者に関する日用品(掃除機、自転車など)の使用の有無の判断を求める点だけが異なる。他者がある日用品を使用するか否かとその他者という自分の特性とは無関係なので情報の関連性という点での促進効果はみられないはずだが、指示ラベルの重複による促進は起こりうる。

実験参加者の募集：所属機関の大学生を対象として実験参加者の募集を行った。募集案内用紙を春学期・秋学期の複数の講義を通して配布し希望者は参加者欄にチェックを入れるよう依頼して集めた。案内用紙には、自分や身近な他者について、PCの画面に映る単語があてはまるか否かを判断する実験であること、所用時間は40分～1時間程度であること、1500円の図書カードが謝礼であること、同性の友人について判断を求めるので任意の友人1名の日常的な呼び名を記入してもらいたいことを明記した。また参加希望者には愛着スタイル尺度および自己観尺度を含む質問紙への回答を求めた。この募集方法で本研究専用の実験参加者プールを作成し、順次日程調節をしながら実験を進めた。

実験材料：自他表象の連合を扱う領域では重要他者や親密他者の表象と自己表象の関わりに焦点が絞られる。自己にとっての重要性があるがゆえに連合が形成されるからである。本研究の実験もこの線に沿って独立変数となる関係性を友人と親とした。具体的には、実験参加者が女性の場合は女性の友人と母親を、男性の場合は男性の友人と父親を刺激人物とした。これは独立変数(関係性)と性要因の交絡を排除するためである。また、刺激人物となる友人と父や母と、実験参加者自身との3者による同時的な相互作用の頻度も尋ねた。この頻度が高いと2者関係のスキーマではなく3者関係のスキーマが形成されている可能性もある。この場合、すべての人物表象が同一関係スキーマ内で連合をもつことになり仮説の検証にならない。

実験に用いる特性語は日常的な使用頻度が低くなく意味が明確なものを村上(2000)から選んだ。初期課題と標的課題で類似した意味の特性語が連続呈示されないよう意味の異なる特性語でペアを作った。

具体的な試行の流れは、上図のようであった。指示対象ラベル(「花子」、「花子という自分」など)が現れてから特性語や日用品名を呈示する間隔は、500ms, 1000ms, 1500msの3種類として予期的反応を防止する。条件の組合せで16種類の試行パターンがあった。各条件について12試行の反応時間の対数平均値を算出した。全体の試行数は192試行であった。別に16試行の練習試行を行った。なお、特性語は感情価が極端でない語を用い、日用品名詞は男性的、女性的、中性的なもののバランスをとった。

4. 研究成果

自分自身の行動は過去事例として記憶されるだけでなく、自己の行動特性情報として意味的に要約されており、「話し好き」、「気が短い」といった特性語を用いて表すことができる。自己概念の一部は、このような特性語が自分自身にどの程度当てはまるかによって評価される。しか

し、自己の行動は状況を通じて常に安定しているわけではなく、様々な他者の存在やその時々
 の状況の変化によって変動する。それゆえ、特性語が当てはまる程度の判断もそれほど安定的では
 ない。

このような自己の特性情報は、関係性スキーマとして他者の特性情報と連合して保持されて
 いるようである。これまでの研究でその部分的な証拠も得られてきた。図1の左パネルは、初期
 課題が「友人」に関する特性判断であるときには「友人という自分」の特性判断が促進され、初
 期課題が「友人という自分」であるときには「友人」の特性判断が促進されることを示している。

「親」と「親という自分」の特性判断についても効果量は小さいが同様の効果がみられた。一方、
 右パネルは統制課題で、初期課題が「友人」や「親」が日用品をよく使うかの判断である場合に
 は、標的課題の特性判断を何ら促進しなかった。

また、複数の関係性を弁別して自己の特性に関する判断がなされることも示された。このよ
 うな知見は、特性判断には関係性による変化があることを示している。

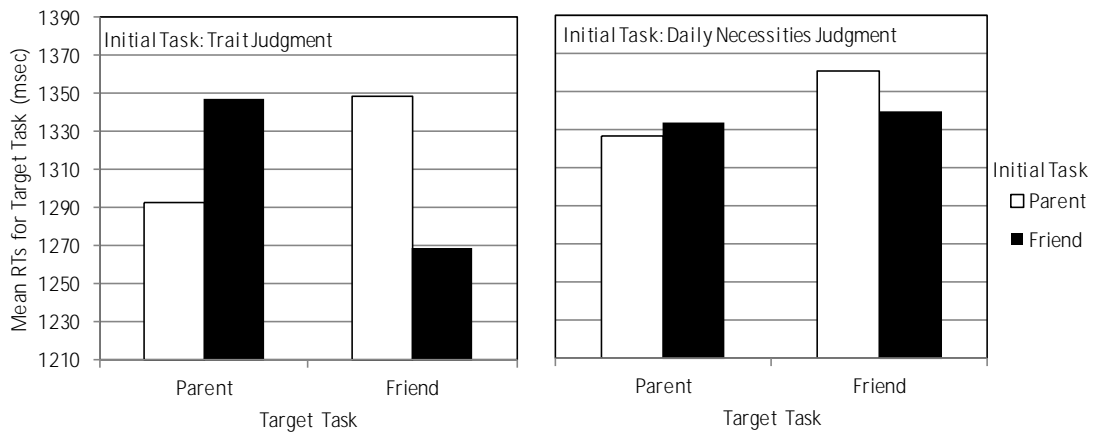


図1 初期課題による標的課題の促進効果

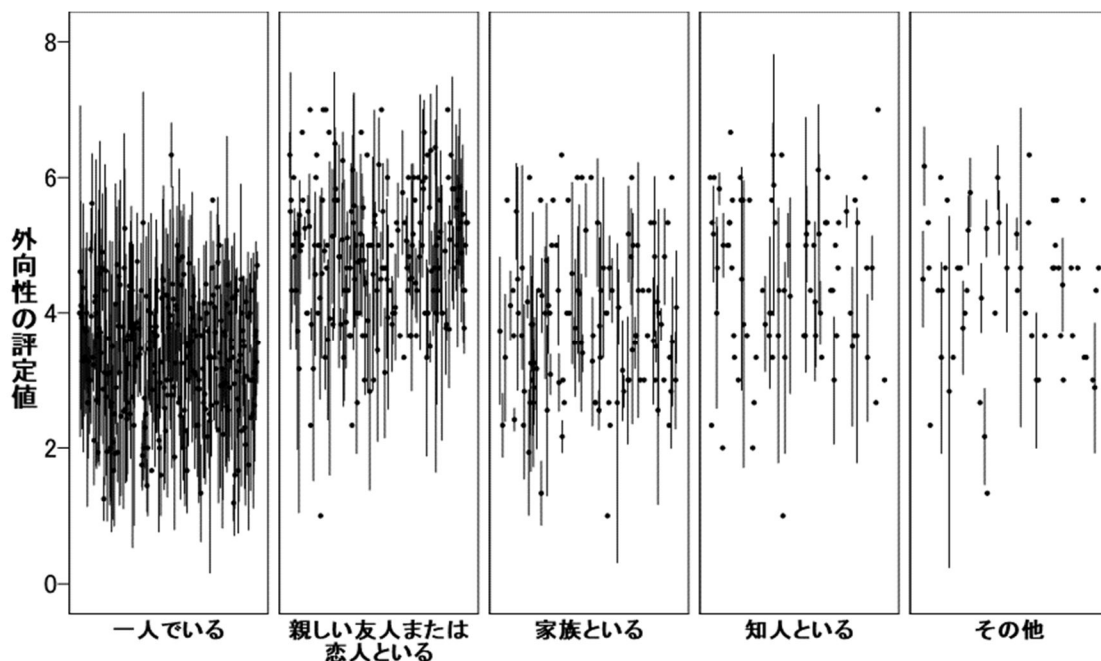


図2 特性判断の個人間変動と個人内変動

しかし、同一の関係内に着目してみても特性判断には変動がある。その特性判断の変動につい
 てさらに調べるため、数日間の測定間隔を置きながら一カ月程度の期間に、自己の特性判断を繰
 り返し行う方法を用いたところ、人は同じ関係性においても自己に関して異なる判断をしてい
 ることが明らかになった。図2は、その様相を平均値(・)と±1標準偏差の線分で表したもの
 である。

また、異なる関係性による変動と同一の関係内でみられる変動とを区別すると、いずれも自己
 愛が高いほど変動性の高い傾向がみられた。一方、自己概念の不安定性は精神的健康の低さと関
 連があるとみられてきたが、本研究では異なる関係性による変動ではなく、同一の関係内に見ら
 れる変動が高いほど健康度が低いという関連が見出された。

自己と他者の特性情報の連合を仮定する関係性スキーマ理論の観点からは、関係性による自己概念の変動を説明する。しかし、それのみでは関係間の変動しかみることができない。一定期間の間に繰り返し自己に関する特性判断を求める方法でデータを得たところ、関係間の変動のみならず、関係内にも一定量の変動がみられた。さらに、その関係内の変動は自己愛や精神的健康のような個人差指標と関連があった。当初計画は、関係性スキーマ理論に立脚して研究を進める予定であったが、自己の特性情報や自己概念に関する研究を進めるためには、自己に関する特性判断の個人内での変動の大きさを評価する方法を確立することと、その変動が何に起因するのかについての検討が必要であるとわかった。当初計画は行き詰まっていた部分もあったが、新たな研究展開に向けて大きく進展できた。また、これまでの知見を著書としてまとめることもできた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 福島 治	4. 巻 33
2. 論文標題 関係文脈内の自己と他者の特性表象の重複：石井（2009）の再現研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 73～83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） dx.doi.org/10.14966/jssp.1616	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 福島治
2. 発表標題 人格特性評定の変動における関係文脈の効果：マルチレベルモデリングによる分散の分割
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福島治
2. 発表標題 関係文脈における自己概念の分化と不安定性
3. 学会等名 東北心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Osamu Fukushima
2. 発表標題 Variability in narcissists' self-concepts: Effects of recent interpersonal acceptance and rejection
3. 学会等名 European Congress of Psychology（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福島治
2. 発表標題 自他の特性情報の重複に関する研究
3. 学会等名 東北心理学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 福島治	4. 発行年 2019年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 218
3. 書名 自己概念のゆらぎ：対人関係におけるその分化と変動	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----